

アクセント教育の体系的シラバスと アクセントの「ゆれ」

松 崎 寛

A Systematic Syllabus for Accent Training
and Variation of Accent

Hiroshi MATSUZAKI

1. 「中高校」は必要か

日本語教育学会編(1991)は、5つの日本語教育機関で音声指導の内容と方法を調査し、「五十音」「音声連続」「外来語音」「拍とリズム」「アクセント」「イントネーション」「プロミネンス」そして「教科書・教材の音声表記」の、「指導が必要と思われる項目」と「それらを教えるにあたって特に注意すべき点」を整理した。これは、体系的音声教育を行うためのシラバスを網羅的に示したものとして、多くの研究に引用されている。だが、松崎(2001)は、この項目の立て方や注意点が、音声学・音韻論研究の上に成立していることは明らかである。しかし、教師養成講座や参考書などで「調音点」「調音法」「アクセント体系」…に関する知識が音声研究者から無批判に与えられている現状にも再考の余地はあろう。どんな知識がどこまで現場で必要とされるのか、音声教育の立場から、あらためて問うてみる必要がある。(p.213)と述べ、特に図1に掲げる、「アクセント」につい

て、音声教育学的観点から再考している。

図1の「型の区別」の説明にあるように、教育現場で「アクセント教育」というと、「平板型・尾高型・中高校・頭高型」からなる一覧表を示して、学習者に「平板」「尾高」などの名称を教え、名詞のどの語がどの型になるかを、何度も練習して覚えさせる、という活動が想像されることが多い。そして、型の名称を覚えなければ、体系的アクセント学習が行えないかのように考えられている傾向が強い。

しかし、「アクセントの『体系的教育』」とは、「『アクセント体系』の教育」と同義では、決してない。アクセント型一覧表のどこにどの語を収めたらきれいに整理できるかという「研究」のためのものが、「教育」に有効だという保証はないのである。

たとえば、この「中高校」とは、核の位置を前から指定した際に際立つ存在である「頭高型」でもなく、後ろから指定した際に際立つ「尾高型」でもないもの、つまり「起伏式だが頭高型でも尾高型でもないもの」の総称であり、4拍以上の語では、中高校の種類が増えていく。その結果、動詞の/あそべ¹ば/

アクセントの種類	……高低アクセントであること。
型の区別	……語ごとに型が決まっている。平板型(ツクエガ)、尾高型(アタマガ)、中高校(タマゴガ)、頭高型(ミドリガ)。上がり下がり……1拍目と2拍目は高さが違う。1語の中では、1度下がったら、もう上がらない。
特殊な拍との関係	……長音・撥音・促音・連母音の次の音では下がらない。 コーギョー(工業) インサツギョー(印刷業)、 リンギョー(林業)、ケッコー(結構)、ハイル(入る)
母音の無声化との関係	……無声化のため、高の部分が動くことがある。 キソ・キソ(基礎)、キタ・キタ(来た)
連語	……アカイ+ハナ→アカイハナ ハルガ+キタ→ハルガキタ

図1 日本語教育学会編(1991:66)のアクセントのシラバス

と「たべれば」のように、核の位置が異なるものが同じ「型」にまとめられることになる。このことに、どんな音声教育学的意義があるだろうか。

アクセントの生成に必要なのは高さの正確な指定である。「仮定形は中高型」という、*/あそ¹べば/*/たべ¹れば/のような誤った型を産出する危険性のある知識ではなく、「仮定形は2グループに分かれ、『遊べば』は/○○○¹○/に、『食べれば』は/○○¹○○/になる」という具体的な情報が重要なのである。

る。

さて、アクセントは語ごとに異なるものであり、個別に記憶力勝負で覚えるしかないと考えられがちだが、一部には、このように、規則を覚えれば、初出語であっても核の有無および位置が予測できる語群がある。図2の(1)(2)がそれで、(1)は1つの規則で、(2)は2つの規則で予測できる語である。

図2は要するに、活用も含めて、広い意味での複合語アクセント規則に従うものである。複合語アクセント

- | |
|--|
| (1)・動詞「～ま ¹ す」「～よ ¹ う」(表1参照) |
| ・複合名詞(「～や ¹ すみ」「～う ¹ りば」「～だ ¹ いがく」「～植 ¹ 物」等)、外国人の名+姓 |
| ・名詞+接辞類(「～課」「～語」「～側」「～組」「～機」「～市」「～人」「～駅」等) |
| ・数詞+接辞類の一部(「～時」「～分」「～歳」「～杯」「～時間」「～しゅ ¹ うかん」等) |
| (2)・(1)以外の動詞の活用形(表1参照)、形容詞(表2参照)。 |
| ・数詞+接辞類の一部(「～冊」「～年」「～台」「～月」等)(表3参照) |

図2 核の位置が予測できる語群

表1 動詞のアクセント(松崎・河野1998)

		五段	一段	サ変	五段	一段	カ変
未然	ない	みがかない	あけない	しない	あるか ¹ ない	たべ ¹ ない	こ ¹ ない
	(よ)う	みがこ ¹ う	あけよ ¹ う	しよ ¹ う	あるこ ¹ う	たべよ ¹ う	こよ ¹ う
連用	ます	みがま ¹ す	あけま ¹ す	しま ¹ す	あるま ¹ す	たべま ¹ す	ま ¹ す
	た, て	みがいた	あけた	した	ある ¹ いた	たべ ¹ た	き ¹ た
終止		みがく	あける	する	ある ¹ く	たべ ¹ る	く ¹ る
仮定	ば	みがけ ¹ ば	あけれ ¹ ば	すれ ¹ ば	ある ¹ けば	たべ ¹ れば	く ¹ れば
命令		みがけ	あける	しろ	ある ¹ け	たべ ¹ ろ	こ ¹ い

表2 形容詞のアクセント(松崎・河野1998)

ない	あかくな ¹ い	あかるくな ¹ い	しろくな ¹ い・しろ ¹ くな ¹ い	うるさくな ¹ い・うるさ ¹ くな ¹ い
た	あか ¹ かった	あかる ¹ かった	しろ ¹ かった・しろ ¹ かった	うるさ ¹ かった・うるさ ¹ かった
	あかい	あかるい	しろ ¹ い	うるさ ¹ い
ば	あか ¹ ければ	あかる ¹ ければ	しろ ¹ ければ・しろ ¹ ければ	うるさ ¹ ければ・うるさ ¹ ければ

表3 前の数により型が異なる接辞のアクセント

	下がらない or 尾高	下がる(接辞の前の音節で)
「曲」「冊」「足」「匹」	1, 6, 8, 10	左以外
「年」	3, 4, 5, 9(く)	左以外
「台」「本」「枚」	5	左以外
「番」	3, 5, 9(く)	左以外
「月」	右以外	3, 5, 9(く)
「円」	右以外	4, 5, 7, 9
「点」	右以外(/て/で下がる)	4, 7, 9

- ①複合語の前要素はすべて平らになる
- ② a. 後要素は、自立語の場合、後要素の最初で下がる
 (ひるや¹すみ←やすみ¹, にほんごきょ¹ういく←きょういく)
 (バーゲンセ¹ール←セ¹ール, にほんごきょ¹うし←きょ¹うし)
- b. ただし、後要素が中高型なら、元の下がり目と同じになる
 (バタークリ¹ーム←クリ¹ーム, にほんごきょうか¹しよ←きょうか¹しよ)
- c. 後要素が中高型でも、一部の語は後要素の最初で下がる。ただし、ゆれもある
 (アイスコーヒ¹ー・アイスコーヒ¹ー←コーヒ¹ー, なまた¹まご・なまたま¹ご←たま¹ご)
- ③接辞の場合、平らになる。または、後要素の1つ前の音で下がる
 (そうむか←か, アラビアご←ご, きそくてき←てき)
 (みえ¹けん←けん, うえの¹えき←えき, カナダ¹じん←じん, イラ¹ンじん←じん)
 (ただし「日本人」は「にほ¹んじん」ではなく、例外的に「にほんじ¹ん」になる)

図3 複合語アクセント規則

セント規則を整理したものが図3であるが、この規則の説明になると、図3②のように、後要素が「中高型か、そうでないか」という区分が有効に働くように見えるものもある。しかしこれも、「中高型」の概念をどうしても教えなければならないわけではない。ここで発想の転換となる鍵は、②a.における頭高型の存在である。後要素が頭高型なら、「後要素の最初で下がる」とも「元の下がり目と同じ」とも言える、つまり頭高型は中高型とともに②b.規則に従うとも解釈できるわけである。そこで、実際には尾高型は「下がる」ものだが、あえてそこをウヤムヤにして、

2語が1語になると、下がり目は、後の語のアクセントと同じ位置1ヶ所になります。しかし、後の語が平らな場合(平板型と尾高型)は、その語の最初の音で下がります。

のように説明することも可能である。学習者にとってどちらがより理解されやすい説明であるかは、実際の指導事例を積み重ねて検証していくしかないが、「中高型とは何か」を学習者に詳しく教える必要は、必ずしもないということである。

図3③についても、音声教育学的観点から考えた場合、問題が残る。「自立語であるか接辞であるか」という区分は、学習者にとって有効な知識とは言えない。たとえば、「鏡山」「子供部屋」などの「山」「部屋」は、普通に考えれば自立語だが、これを接辞とせざるをえなくなるのは、③の規則から導き出される定義であって、アクセントから語の属性を特定したに過ぎない。学習者の頭の中はその逆で、アクセントがわからないから「ある語が自立語か付属

語か」という情報を必要とするのである。

接辞は1~2拍のものが多いので、学習者の用いるであろうストラテジーとしては、後要素の長さが重要な情報となる。実際、後要素の拍数により、2拍以下か3・4拍か5拍以上かで各々の規則を網羅した説明もあるが、これもやはり例外があり、規則を完璧にしようとするとは煩雑になりすぎるきらいがある。ある程度の大まかな規則を抑えたら、あとは個々に語彙処理したほうが実効的であろう。

すなわち、ある語が自立語か付属語かという情報、そして拍数別に整理した細かい規則は、複合語アクセント規則を覚えるのに、あまり有効とは言えない。重要なのは、「○○大学」「○○駅」という語を発音する際、「○○」がどんな地名でも、アクセントは/〜だ¹いがく//〜¹えき/になる、という、語ごとの具体的な知識である。複合語のアクセント練習という点で、「複合する前の元の2語の型がわからなければ、正しく発音できない」と考えられがちであるが、そこは逆に、「語ごとに後要素の下がり目さえ覚えていけば、前要素のアクセントが何かを知らなくても正しいアクセントで発音できる」という考え方を学習者にさせることが重要なのである。

2. 規則の簡素化

以上の規則を、音声教育学的観点からさらに整理し、アクセント教育への提言を試みる。

図2(1)は、1つの規則さえ覚えれば例外なくすべてに適用できるので覚えやすく、早期に習得される(吉光 1981, 河野 1999.2)。だが、図2(2)は、

2つ以上の規則を正確に覚え、適用したとしても、ある語がどちらのグループに所属するのかを間違えば、発音を誤る可能性がある(河野 1999.2)。

前述のように、アクセントを体系的に教えるには、型を1つ1つ暗記させるだけではなく、特に図2(1)のような有用な規則を積極的に扱ったシラバスを構築する必要がある。場合によっては、アクセントがゆれている場合、体系的教育に都合の良いものを取りあげ、規則を簡素化して示す必要もあるかもしれない。つまり文法でいう pedagogical grammar (教育文法) の考え方である。

しかし、簡素化された規則により産出されたアクセントが日本人に受け入れられないような事態は避けなければならない。そこで、今回の研究では、図2(2)の動詞や形容詞の活用形のうち、体系的な観点から簡素化した規則にまとめられるものの可能性について整理し、また、その発音が「ゆれ」によりどの程度許容されるかを調査することにする。

2.1. 動詞のアクセント

動詞ナイ形は、/し「ない//あ「けない/のように「下らないグループ」と、/「み」ない//た「べ」ない/のように「下がるグループ」とに分けられる、と教えることが多い。これは、図4を見るとわかるように、他の活用形のアクセントとの繋がりを重視してグループを分ける説明方法である。

しかし、実際には、「下らない」動詞には、
/あ「けよ」う/ /あ「けま」す/ /あ「けれ」ば/……
等のように「下がる」活用形も存在する。つまり、「下らない」という規則で全体を括る必要は必ずしもない、ということになる。

/あ「け ない/ /あ「けた/ /あ「けて/ /あ「ける/ /あ「ける/
/た「べ」ない/ /た「べ」た/ /た「べ」て/ /た「べ」る/ /た「べ」る/

図4 「下らないグループ」と「下がるグループ」

①: /し「ない/ /し「ない」こと/ /し「なくなる」/ /し「ない」で/ /し「ない」くて/ /し「ない」かった/ /し「ない」ければ/
②: /「み」ない/ /「み」ない」こと/ /「み」なくなる/ /「み」ないで/ /「み」なくて/ /「み」なかった/ /「み」なければ/



③: /し「ない」い/ /し「ない」いこと/ /し「ない」くなる/ /し「ない」いで/ /し「ない」くて/ /し「ない」かった/ /し「ない」ければ/
④: /「み」ない/ /「み」ない」こと/ /「み」なくなる/ /「み」ないで/ /「み」なくて/ /「み」なかった/ /「み」なければ/

図5 動詞ナイ形のアクセント規則の簡素化

そしてまた、次が大きな問題であるが、動詞ナイ形がさらに活用した場合は、

/し「ない」いでくださいい/ /し「ない」くてもいい/
/し「ない」かった/ /し「ない」ければなら「ない」/…

のように、/な/で「下がる」ものも多い。初級日本語教育において、ナイ形は上記のような文型で練習することが多いが、「/し「ない」は下がりません」と言った直後に、/し「ない」いでくださいい/の発音練習をさせるようでは、混乱を生じかねない。

これをまとめると、図5①②のようになる。だが、そのようにグループ分けをしたうえで①にあたる動詞を二つに分けて「～ない」を捉えさせるのは、規則が複雑になる。そこで、これを、「/な/で下がる(③)か、/な/の前で下がる(④)か」という規則で括れば、非常にすっきりする。

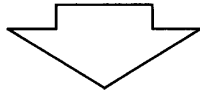
なお、学習者の発音では、動詞ナイ形はすべて/～ない/になる傾向が強い。これにあわせて、④も/～ない/にし、すべての動詞ナイ形を1つの規則で処理すれば非常に簡素化されるが、

/み「ない」い/み「ない」いこと*/み「ない」いで/
/み「ない」くて/み「ない」かった*/み「ない」ければ/
等は、許容度が下がることが予想される。

2.2. 形容詞のアクセント

辞書形が平板式のお「そい//あ「ぶない//く「だら
ない/等は、図6①のように、辞書形と「～く」は
平板になり、「～くて」「～かった」「～ければ」は、
/く//か//け/の1拍前で下がる。一方、辞書形が起
伏式の語は、図6②のように、3拍の/た「か」い/等
は、「～く」「～かった」「～ければ」ともに、/く/
/か//け/の2拍前で下がるが、4拍の/み「じか」い/

- ① /お「そい」/ /お「そく」/ /お「そくな」い/ /お「そく」て/ /お「そ」かった/ /お「そ」ければ/
 /あ「ぶない」/ /あ「ぶなく」/ /あ「ぶなくな」い/ /あ「ぶな」くて/ /あ「ぶな」かった/ /あ「ぶな」ければ/
 ② /た「かい」/ /た「かく」/ /た「かくな」い/ /た「か」くて/ /た「か」かった/ /た「か」ければ/
 /み「じか」い/ /み「じ」かく/ /み「じ」かくない/ /み「じ」かくて/ /み「じ」かかった/ /み「じ」かければ/



- ③ /お「そ」い/ /お「そ」く/ /お「そ」くない/ /お「そ」くて/ /お「そ」かった/ /お「そ」ければ/
 /あ「ぶな」い//あ「ぶな」く//あ「ぶな」くない//あ「ぶな」くて//あ「ぶな」かった//あ「ぶな」ければ/
 ④ /た「か」い/ /た「か」く/ /た「か」くない/ /た「か」くて/ /た「か」かった/ /た「か」ければ/
 /み「じか」い//み「じか」く//み「じか」くない//み「じか」くて//み「じか」かった//み「じか」ければ/

図6 形容詞のアクセント規則の簡素化

は、「～く」は/く/の1拍前で下がり、「～かった」「～ければ」は、/か//け/の2拍前で下がる。5拍の/お「もしろ」い/等は、さらに異なる型になるし、またそれ以外のゆれも多い。個別に覚えるべき規則が非常に多い。これを、図6③④のように統一すれば、『～く』は/く/の前で、『～かった』は/か/の前で、『～ければ』は/け/の前で下がる」ようになる。もっと整理して簡単に言えば、

辞書形と同じ位置で下がる。辞書形は後ろから2拍目(－2)が下がり目である

という規則ですべてを括れるため、グループの覚え違いで発音を間違える危険性が減る。

稲垣・堀口(1979)が昭和52年に東京の中学生のアクセントの実態を調査した結果では、伝統的には平板型であった3拍形容詞は42.5%が、4拍形容詞は99.4%が－2型化しているという結果が出ている。形容詞の活用形全体が規則性を増しつつあるという指摘は、中尾ほか(1997)にもある。

秋永(1981)には、次のような「注意」がある。

近年、若い人人の間では次のような中高化傾向がみられる。しかし、形容詞に平板式と起伏式の別があるほうが、語の弁別ができて望ましいと考える。(中略)

(i) 平板式形容詞の終止形を中高型に発音する。

(ii) 起伏式形容詞の連用形・假定形のアクセントの高さの山を一拍後ろにずらして発音する。

(アクセント習得法則52：p.49)

ただしこの「語の弁別ができて望ましい」という記述には異論がある。松崎(2000)が日本語能力試験1級出題範囲の基本7,800語を対象に同音語の弁別力を調査したリストによれば、形容詞のミニマル・ペアは、「熱い・暑い/厚い」があるのみで、機能効率の負担は低く、「弁別ができないと困る」とい

う指摘はあたらぬ。音声教育学的には、規則が簡素化するので、歓迎すべき変化だといえよう。

東京型アクセントの一種と言われる広島方言の若年者層を調査した馬瀬(1994)でも、やはり3拍形容詞の統合傾向が報告されているが、同時に、「～月」がすべて/～/がつ/という1つの型に統一されるといふ、共通語化から「逆行」する現象も報告しており、テレビなどで同様の型がしばしば聞かれることが指摘されている。

3. 日本人評価

ここまでの議論で、何をどう教えると体系的音声教育に役立つかについて考えてきたが、実際にどのように発音された型は、どの程度日本語話者に受け入れられるかを検証する必要がある。アクセントそのものは、「型を多少間違えても評価にそれほど影響はない」と指摘する先行研究があるが、それらはいわば大雑把な結論であり、アクセントならアクセントの何をどう間違えると評定が下がるのか、という問題について、より具体的に調査しなければ、教育への提言が行えない。

今回の調査対象者は、仙台市内で日本語を教えるボランティアをしている女性20名である。言語形成期である小学校時代を過ごした地域は、札幌、宮城、山形、埼玉、東京、横浜、愛知、福井、京都、広島など様々であったが、母集団が少数なので、ここでは一括して扱った。問題は全部で60問で、3拍・4拍の動詞ナイ形および形容詞をさまざまに活用させたもの(表4)をランダムに並べ替え、読み上げた。読み上げは2度ずつ行い、「自然か不自然か」を○△×の3段階で評定させた。自然なら○、不自然なら×、どちらとも決めがたい場合は△も可とした。

表4 調査語

あま ¹ い	つめた ¹ い	いな ¹ い	いかな ¹ い
あまい	つめたい	いない	いかない
あま ¹ いとき	つめた ¹ いとき	いな ¹ いとき	いかな ¹ いとき
あまいとき	つめたいとき	いないとき	いかないとき
あま ¹ かった	つめた ¹ かった	み ¹ ない	かか ¹ ない
あま ¹ くなる	つめた ¹ くなる	みな ¹ い	かかな ¹ い
あま ¹ くな ¹ る	つめた ¹ くな ¹ る	み ¹ ないで	かか ¹ ないで
あま ¹ ければ	つめた ¹ ければ	みな ¹ いで	かかな ¹ いで
あお ¹ い	みじか ¹ い	み ¹ ないとき	かか ¹ ないとき
あお ¹ いとき	みじか ¹ いとき	みな ¹ いとき	かかな ¹ いとき
あ ¹ おかった	みじ ¹ かかった	み ¹ なかつた	かか ¹ なかつた
あお ¹ かった	みじか ¹ かった	みな ¹ かつた	かかな ¹ かつた
あ ¹ おくなる	みじ ¹ かくなる	み ¹ なければ	かか ¹ なければ
あお ¹ くなる	みじか ¹ くなる	みな ¹ ければ	かかな ¹ ければ
あ ¹ おければ	みじ ¹ かければ		
あお ¹ ければ	みじか ¹ ければ		

表5 調査語が不自然と評定された得点 (40点満点)

あま ¹ い	12	つめた ¹ い	7	いな ¹ い	12	いかな ¹ い	10
☐あまい	1	☐つめたい	6	☐いない	6	☐いかない	13
あま ¹ いとき	30	つめた ¹ いとき	12	いな ¹ いとき	21	いかな ¹ いとき	16
☐あまいとき	13	☐つめたいとき	11	☐いないとき	16	☐いかないとき	16
☐あま ¹ かった	8	☐つめた ¹ かった	2	☐み ¹ ない	10	☐かか ¹ ない	3
あま ¹ くなる	30	つめた ¹ くなる	17	みな ¹ い	29	かかな ¹ い	24
☐あま ¹ くな ¹ る	0	☐つめた ¹ くな ¹ る	2	☐み ¹ ないで	13	☐かか ¹ ないで	5
☐あま ¹ ければ	7	☐つめた ¹ ければ	6	みな ¹ いで	28	かかな ¹ いで	23
☐あお ¹ い	0	☐みじか ¹ い	2	☐み ¹ ないとき	10	☐かか ¹ ないとき	6
☐あお ¹ いとき	0	☐みじか ¹ いとき	7	みな ¹ いとき	30	かかな ¹ いとき	19
☐あ ¹ おかった	4	みじ ¹ かかった	25	☐み ¹ なかつた	4	☐かか ¹ なかつた	2
あお ¹ かった	19	☐みじか ¹ かった	4	みな ¹ かつた	17	かかな ¹ かつた	14
☐あ ¹ おくなる	9	みじ ¹ かくなる	25	☐み ¹ なければ	12	☐かか ¹ なければ	8
あお ¹ くなる	19	☐みじか ¹ くなる	3	みな ¹ ければ	26	かかな ¹ ければ	10
☐あ ¹ おければ	9	みじ ¹ かければ	27				
あお ¹ ければ	14	☐みじか ¹ ければ	2				

不自然と評定された×を2, ○を0, △を1として集計すると、表5のようになる。全体的傾向としては、伝統的アクセント(☐)のほうが相対的に数値が小さい。つまり新アクセントのほうが不自然と評定される傾向が強いが、4拍平板の「冷たい」「冷たいとき」は、核あり・核なしの数値がほぼ同等で、新アクセントである起伏式の自然度も高く、先行研究の指摘と一致する。同様の傾向は4拍平板の動詞ナイ形「いかない」「いかないとき」にもみられる。したがって、体系的音声教育においては、/つめた¹い//つめた¹いとき//いかな¹い//いかな¹

いとき/を基本として扱っても問題ないと考えられる。

だが、すべての活用形を同じ核位置で処理する方法をとろうとすると、/つめた¹くなる//あま¹くなる/が/つめた¹くな¹る//あま¹くな¹る/に比べ、かなり不自然と評定されている結果が問題となる。また一方、3拍の形容詞・動詞ナイ形における/あま¹い//あま¹いとき//いな¹い//いな¹いとき/は、伝統的アクセントである平板式よりもかなり不自然と評定されている。統一するという点から言えば、4拍・3拍ともに新アクセントを採用し、

4拍語は前から3拍目が、3拍語は前から2拍

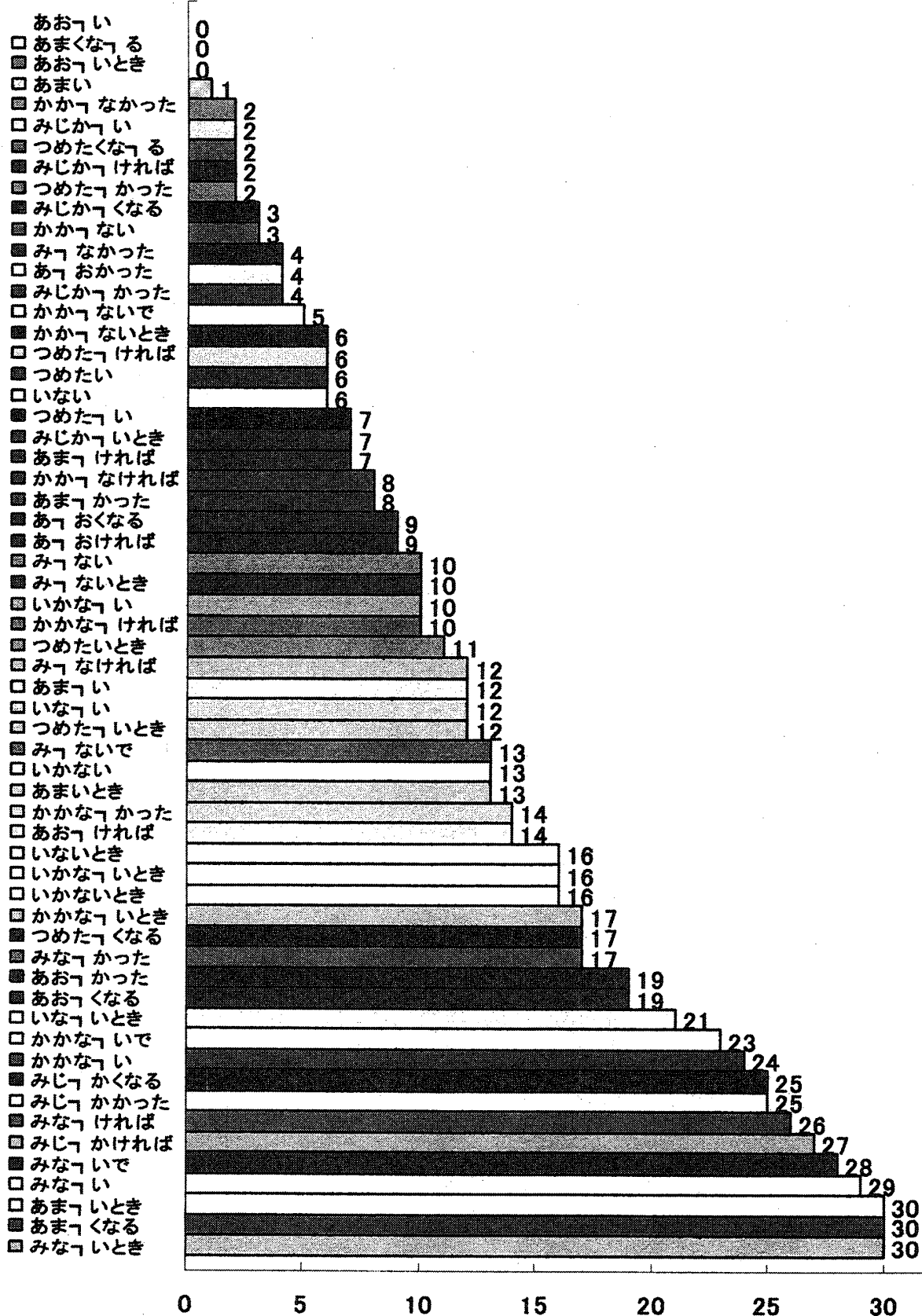


図7 調査語が自然と評定された順

目が核になる

という規則で括ることが望ましいが、形容詞・動詞ともに、この一語の調査結果だけでは、断定的なことが言えない可能性もある。語の慣用度などを考慮した再調査を行い、熟考すべき問題である。

自然と評定された順に並べ替えてグラフを示すと、図7のようになる。すべての動詞ナイ形を1つの規則で処理するための人工的な形、/みな¹い//かかな¹い/などの、/な/に核がある語は、予想通り不自然と評定され、下方に集中している。動詞ナイ形は、やはり2グループに分けてアクセント教育を行うべきだと考えられる。

今回の調査は、被験者の属性統一という点では、出身地の統制がなされなかった点に問題が残る。また、すべて日本語教育関係者の女性ということで、一般日本人の結果と異なる結果が出た可能性も否定できない。今後、さらに調査対象者を変えながら調査を継続していく必要がある。

また、一つの型に対して一語しか用いず実験を行った点にも問題が残る。ある語のアクセントが自然か不自然かを評定する際には、その語の慣用度や性質などが大きく関わることが予想される。極端な例として、形容詞と動詞ナイ形の接点を扱う、動詞ナイ形から転成したと考えられる形容詞の問題がある。たとえば「つまらない」「煮え切らない」「いたたまれない」「そぐわない」などは、品詞としては形容詞として辞書等に登録されているが、これを起伏式形容詞/みじか¹い//うさ¹い/あるいは起伏化した平板式形容詞/つめた¹い//あぶな¹い/などと同様に、

* /つ「まらな¹い/* /つ「まらな¹くな¹い/

* /つ「まらな¹かった/* /つ「まらな¹ければ/…

と発音したものは、許容度が下がることが予想される。この語自体は、アクセント教育においては、例外処理したほうが良いだろうが、アクセントのゆれが語ごとに異なる可能性については、留意せねばならない問題である。

また、「だれが」その誤った発音をするのかに関して、考えるべき課題がある。日本人が発音した場合と外国人が発音した場合、どちらがより厳しくなるか。先行研究の事例にしたがえば、外国人のアクセントには寛容である結果が出そうだが、超級学習者を「評価する」際には、場合によっては日本人より厳しくなる可能性もある。どのような調査を行えば、より自然な「本音」に近いものが調査対象者から引き出せるかが、今後の課題である。

参考文献

- 秋永一枝 (1981) 「アクセント習得法則」 秋永一枝 編『明解日本語アクセント辞典 第2版』三省堂
- 稲垣滋子・堀口純子 (1979) 「東京語におけるアクセントのゆれ」『ことばの諸相』文化評論出版
- 河野俊之 (1999.2) 「動詞のアクセントの習得」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』平成8-10年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 河野俊之 (1999.3) 「日本語教科書のイントロダクションにおける音声項目の扱い方」『総合文化研究所紀要』16, 同志社女子大学
- 田中真一・窪園晴夫 (1999) 『日本語の発音教室』くろしお出版
- 中尾俊夫・日比谷潤子・服部範子 (1997) 『社会言語学概論』くろしお出版
- 日本語教育学会編 (1991) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
- 馬瀬良雄編 (1994) 『広島方言アクセント辞典』中野出版企画
- 松崎寛 (1999) 「韓国語話者の日本語音声—音声教育研究の観点から—」『音声研究』3-3, 日本音声学会
- 松崎寛 (2000) 「初級日本語学習者向けアクセントのミニマル・ペア」『広島大学日本語教育学科紀要』10, 広島大学教育学部日本語教育学科
- 松崎寛 (2001) 「日本語の音声教育」『日本語教育学シリーズ第3巻 コンピュータ音声学』おうふう
- 松崎寛・河野俊之 (1998) 『よくわかる音声』アルク
- 吉光邦子 (1981) 「外国人の日本語(4) 外国人学習者のアクセント」『日本語教育』45, 日本語教育学会

付記 本稿は、松崎寛・河野俊之 (2001) 「アクセント教育の体系的シラバスとアクセントの『ゆれ』について」(第3回日本語音声教育方法研究会)での発表内容にその後の知見を加筆しまとめたものである。共同研究者である河野俊之氏には、本稿の着想・考察の多くを依っている。ここに記して深謝する。

なお、本研究は、基盤研究(C)(1)「日本語学習者に対する韻律指導教材の開発」(課題番号13680364)による研究成果の一部である。